

△逢ひて逢はぬ恋△の狭衣

——女二の宮物語の表現と方法——

一 △逢ひて逢はぬ恋△

狭衣は、女二の宮と密通した後にも果たして逢瀬があったのだろうか。女二の宮が出家して「入道の宮」になった後、物語末尾の対面の場までに、狭衣は三度ほど逢瀬を試みているが、いずれも未遂に終わっている。しかし、物語本文の語るところに拠れば、密通以後も具体的には語られない何度かの逢瀬があったことになっている。その本文を集成本（巻と頁数を付記。表記は私に変えた。以下同じ。）に拠って示せば、次のようになる。

① ただありしやうにて、わりなきひまなどに見る夢の直路にまどひたまふ折々、ほのかなるたびごとには、いとど心苦しうおぼし侘びたるさまなど、ただ世の常の人にてだにおろかに思ふべき心地もしたまはず。
(二・158～159頁)

② あさましく思ひかけざりし夜な夜なに変はらねば、
(二・196頁)

③ 夢のやうなりし夜な夜な、泣きたまふよりほかのけはひは聞か
でやみき。
(三・16頁)

④ 下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし
(三・87頁)

①は、密会後しばらくたっての頃、②は女二の宮の出家後に狭衣が

寝所に侵入した時のもの、③は粉河詣でから帰京した後のものになるが、いずれにも逢瀬が複数あったことを示すような言辭がある。④は、狭衣からの消息に女二の宮が書き付けた三首の歌の一首である。

①の部分に対して、集成本は「ただあの夜と同様に 無理な隙間に人目を忍ぶまるで夢の様な 恋路にあわただしく逢われる時々 それもかすかな逢瀬のたびごとには」と傍注を付し、頭注は「どんな無理算段をしたものか、狭衣はその後女二の宮に逢っているというのである。状況から見ても無理な設定」と指摘している。この本文の後には、「女宮も、ありし後、起き上がりて母宮にもあきらかに見あはせたまつりたまはず」(二・159頁)とあって、密通以後は起き上がりもしないとされ、その後に逢瀬があったとは思われない。また、懷妊が明らかになった時点でも、皇太后宮や帝が付き添っているので、「いづれのひまにかは御消息をだに聞こえたまはむ」(二・161頁)とされ、逢瀬どころか消息を届けることさえ不可能である。しかし、①を集成本のような本文解釈に拠る限り、逢瀬が複数あったとするほかはないが、ここは夢路の中の逢瀬のことと解釈できなくもない。通行の諸本を、『狭衣物語諸本集成』などによっていくつか見てみると、微妙な差異があるものの、次のような文脈の種類に分けられる。

集成本—わりなきひまなどに見る夢のただちにまどひたまふ折々
大系本—あさましくわりなき夢ぢにまどひ給おり／＼の

倉 田 実

保坂本「わりなきひまなとにみるともなき夢のたゞちにまよひあふをり」

問題となる箇所は、大系本にある「あさましう」の有無、それと集成本の「見る夢のただち」か大系本の「わりなき夢ち」か保坂本の「みるともなき夢のたゞち」かの違い、及び、集成本、大系本の「まどひたまふ」か保坂本の「まよひあふ」かになる。「夢ち」と「夢のたゞち」の違いは、この場合問題にしくなくてもいいので、保坂本の形が問題になる。「みるともなき」とするあり方は、まさに「夢」そのもののことであろう。そうなると、保坂本の「まよひあふ」は、現実のものではなく、夢での逢瀬のことをいっているのであり、「夢のような逢瀬」でもないことになろう。こうして見ると、集成本や大系本も、夢での逢瀬のこととしてもおかしくないことになる。集成本の「わりなきひまなどに見る夢の直路にまどひたまふ折々、ほのかなるたびごとには」が、夢の様を言う文脈ととるわけである。夢だから「まどふ」であり、「ほのかなるたびごと」となる。また、引歌とされる、次の歌の「行き通ふ夢の直路」は、まさに夢の中でのものである。

恋ひわびてうち寝るなに行き通ふ夢の直路はうつならなむ

(古今集・恋二・敏行・五五八)

①の部分は、本文と解釈の両様にわたって問題になるわけである。

②は「あさましく思ひかけざりし夜な夜な」ではなく、「あさましとおぼほされし夜のほひかはらず」(大系本170頁。他に、伝為明筆本、伝為家筆本も)とする本があり、③にも「夢のやうなりし夜な夜な」ではなく、「夢のやうなりし夜のまにも」(伝為家筆本)とする本があり、これらの場合では、密会時を回想する文脈になる。また、④の「下萩の露消えわびし夜な夜な」は、密通以後の一人寝の「夜な夜な」ととれば問題はない。そうなると、①②③は、集成本などとは違った本文が先行していた可能性も考えられることになり、にわかにここから逢瀬複数説をもたらすのは危険になる。しかし、多くの本文は、②③④とも「夜な夜な」とあるので、この語について若干見て

おきたい。

歌の世界では、夢での逢瀬を言う「思ひ寝の夜な夜な夢に逢ふことをただ片時のうつともがな」(後撰集・恋三・よみ人知らず・七六六)という歌もあれば、「深くしもたのまざるらむ君ゆへに雪ふみわけて夜な夜なぞゆく」(詞花集・雜上・好忠)のように実際の逢瀬を言う場合もあり、夢か現実かは「夜な夜な」だけでは決め難い。しかし、女二の宮の物語では「袖の氷とけず明かしたまふ夜な夜なは、今はじめて別れたてまつりたらむ床の心地して」(二・193頁)、「片敷きにいく夜な夜なを明かすらむ寢覚の床の枕浮くまで」(二・197頁)とする、逢瀬のない「夜な夜な」とする用例もあり、先の④のも一人寝の「夜な夜な」ととれる。このように、女二の宮物語で使用される「夜な夜な」の多くは一人寝のものであったことからすると、②③は早い段階で逢瀬が複数であることをいう文脈になってしまった可能性が考えられる。しかし、ことは諸本論の問題になり、複雑である。これだけの調査ではこれ以上の確認は不可能である。

要は、「夢」「夜な夜な」の問題であり、①は本文と解釈の、④は解釈の、②③は逢瀬のない「夜な夜な」であった蓋然性があるということの確認であり、これ以上言及できない。したがって、物語本文が疑わしいとしても、②③からすれば、逢瀬が複数であったと認めざるを得ないが、当該本文の箇所以外の女二の宮や狭衣の意識では、密会・逢瀬は一度だけであったとするのが素直である。逢瀬は一度だけであったことを意味する本文は以下に掲出していくが、狭衣と女二の宮との関係は、逢瀬が一度だけ密通という形で行われ、それ以後の逢瀬はなかったような語りぶりが認められる。したがって、②③の本文を留保したうえで、女二の宮の懐妊は、「一夜孕み」で、その後の逢瀬はなかったということにしたい。

以上のような点を確認するのは、女二の宮に関わる狭衣の物語は、△逢ひて逢はぬ恋△という類型なり話型なりがあつて展開されていると思われるからである。以下、△逢ひて逢はぬ恋△という観点で女二

の宮の物語を見つめてみたいが、まず△逢ひて逢はぬ恋△ということを確認しておきたい。

和歌史的に見ると、△逢ひて逢はぬ恋△という歌題は、『金葉集』が初見。堀河中納言家歌合・堀河百首などの歌題。勅撰集にこの題が明示された歌が一〇五首ある。時代が下るにつれて好まれた。題意は、一度逢ったのち何らかの事情で再びは逢えない恋の心情。いずれも女の立場で詠む。(以下略)⁽¹⁾と説明されている。しかし、△逢ひて逢はぬ恋△の内実は、当然のことながら、『金葉集』以前にも認められるものであり、また、男歌にも存在していた。

逢ひにける女の、また逢はざりければ

知らざりし時に越えし逢坂をなど今さらに我まどふらん

(後撰集・恋六・よみ人知らず・一〇三八)

世の中にしのぶる恋のわびしきは逢ひての後に逢はぬなりけり

(後撰集・恋六・よみ人知らず・五六四)

右の歌は、いずれも男歌で、前者はまさに△逢ひて逢はぬ恋△であることを詞書で示している。また、後に触れるが狭衣詠の引歌にもなりそうであり、後者も狭衣の心情にふさわしい。歌題として明確に意識されたのが『金葉集』成立のころであったとしても、その実際はもっとさかのぼれるのであり、『狭衣物語』は△逢ひて逢はぬ恋△という趣向を、女二の宮の物語に使用していると言えるようである。女二の宮との関係は、人目を忍ぶ「忍ぶ恋」になっており、こうした観点で見ることが可能だが、本稿では、あえて△逢ひて逢はぬ恋△として、その発想や表現を追っていきたい。

二「いま一度」の懇願

狭衣は、女二の宮との密通後の関係発展、すなわち結婚には逡巡しながらも、一方で「思ふままにえ見たてまつらざらむことの嘆かしう」(二・142頁)とする思いに囚われている。結婚という形ではない

逢瀬の困難さが意識されているわけだが、すでにこの時点から、狭衣の△逢ひて逢はぬ恋△が始発していることになる。皇女独身主義の考えを持つ皇太后宮の存在は、狭衣にとって何よりも煩わしく、源氏宮思慕とも絡んで女二の宮降嫁を受け入れ難い心境にあることは周知のことになるが、かといって、女二の宮と密通して、そのままで済ますことも気持ちに許さない。だから、重ねての逢瀬が期待されるが、女二の宮自身は密通の衝撃から回復することなく、狭衣拒否の姿勢は当初から鮮明になっている。△逢ひて逢はぬ恋△としての障害は、△逢ひて△の段階ですでに明かであり、次の逢瀬の機会を求めつつ、逢瀬がかなえられない狭衣の嘆きが、連綿と持続することになる。そして、まず確認したいのは、逢瀬の機会を望む表現の展開になる。

1 明日はありとも思ふべうもあらぬ世に、いま一度見たてまつら
でや。^(二・169頁)

2 いま一度、^{いまと}変はらぬ御有様を、などてあながちにても見たてま
つらずなりにけむ。^(二・193頁)

3 いかで、変りたまへらむさまをだに、け近きほどにて、いま一
度見たてまつらむ。あさましういぶせき心のうちも、人づてなら
で聞こえ知らせむ。^(二・206〜207頁)

4 今はいかやうにかおぼしめしなりたるとも、いかさまにしてか
いまひとたび気近きほどの御けはひを聞くわざもがな。^(三・16頁)

5 ただ、今ひとたびみづから聞こえまほしきことのあるを、その
明け暮れ向かひ居させたまふらむ仏の御前にしるべしたまへ。そ
れをだにこの世の思ひ出にしはべらむ。^(三・83頁)

6 これより隔てなうとまでも思ひたまへかけずなむ。ただかばか
りにても、「今一度聞こえさせてこそは」と、憂きを知らぬさま
にて過ぐしはべりつるを、ただ心やすくおぼしめせ。^(三・161頁)

1 は女二の宮が宮中を退出したことを聞いてのもので、6 は百万遍

の念仏に励む女二の宮がいる御堂に侵入して障子越しに口説く段になる。この間、用例にあるように、「いま一度」逢いたい、「いま一度」出家前の姿を見たかった、「いま一度」気配を聞きたい、などと狭衣は一貫して「いま一度」の逢瀬を念じている。こうした「いま一度」とする用例の連続は、逢瀬が一度しかなかったことを暗示しているのであり、八逢ひて逢はぬ恋としての趣向が狭衣に認められることになる。

「いま一度」の逢瀬を念じるという発想は、和歌の世界でも行われていた。

あらざんこの世のほかの思ひ出にいま一度の逢ふこともがな

(後拾遺集・恋三・和泉式部集・七五三)

山を出でてくらき道にをたづねこしいま一度逢ふことにより

(和泉式部集・八八三)

ともに和泉式部詠で、八逢ひて逢はぬ恋かどうかはわからないが、いずれ無常感に覆われつつ「いま一度の逢ふこと」が念じられている。先の用例1に「明日はありとも思ふべうもあらぬ世」と無常感が言われたうえで、「いま一度見たてまつらでや」とする思いが表出されており、和泉式部詠の趣向そのものになる。また、5では「いま一度みづから聞こえまほしきこと」がなかったら、それを「この世の思ひ出」にしたいとしており、同工である。憂愁の念にとらわれている狭衣の「いま一度」を念じる思いは、和泉式部詠と響き合いつつ、八逢ひて逢はぬ恋の情調を醸し出していることになる。

「いま一度」とする発想が連続して認められたわけだが、これ以外にも、逢いたい、直接話したい、衷心を訴えたいとする用例は多数認められ、それらの用例ともあいまって狭衣の八逢ひて逢はぬ恋の様相を提示している。それらの例挙は割愛し、さらに、八逢ひて逢はぬ恋の趣向と見なせる表現の形を場面に即して見ていきたい。

物語で直接語られる、狭衣が女二の宮と逢瀬を計ろうとする場面は次の五箇所になり、それぞれに八逢ひて逢はぬ恋を表象する固有の

鍵語が指摘できる。

- (1) 弘徽殿での密通 鍵語「逢坂」 (二・136~144頁)
- (2) 皇太后宮邸での寝所侵入 鍵語「寝覚の床の枕」 (二・194~199頁)

- (3) 嵯峨での御堂侵入 鍵語「髪の手あたり」 (三・154~167頁)

- (4) 嵯峨での念誦堂訪問 鍵語「移り香」 (四・154~167頁)

- (5) 嵯峨での最後の対面 鍵語「女郎花」 (四・368~373頁)

この五箇所が、女二の宮物語の主要な場面になるが、この他にも消息を託したり、女二の宮に思いをはせたりすることが多く語られている。これらの段については適宜参照することにして、この五箇所を中心に見ていきたい。密通以後は、まともな逢瀬は一度もなく、そうであることによって、狭衣は八逢ひて逢はぬ恋を強いられていることになる。

三 密通と「逢坂」——巻二

女二の宮との密通そのものは、「櫛の戸」あるいは「関の戸」で暗示されるが、これで八逢ひて逢はぬ恋の八逢ひて逢が成立したことになり、その後八逢ひて逢はぬ恋の様相が語られることになる。

狭衣は密通の翌日、中納言の典侍に後朝の文を託し、垣間見の仲介も依頼しようとするが、そっけなく拒否されてしまい、次のような語り続けている。

この人(中納言の典侍)にも、さやかなる気色たちまちに見せて、かくあながちなる関守を破らむもわづらはしくおぼえたまへば、こまかにも語らはぬものから、うつくしかりつる御気配、有様は、面影におぼえぬにしもあらで、「あなわりなことや。なほさりぬべきひまあらば」などのたまひて、嘆かしきものから、逢坂をなほ行き帰りまどへとや関の戸さしも難からなくにと口ずさみて立ちたまひぬるを、「あやし」と心も得ねば、御返

りも聞こえあへずなりぬ。

(二・151頁)

狭衣は、密通したことを中納言の典侍に悟られまいとし、また、女二の宮の「関守」になっていることもわずらわしい。しかし、仲介役には中納言の典侍しかいず、再度その労を依頼して歌を口ずさんでいく。この歌の配置の仕方、すなわち、贈歌とも独詠歌ともそれ、それでいて伝達性を鼻から氣に掛けないような詠みぶりは、この物語が好むところである。ここも中納言の典侍に聞かれては、実情を知らないのも意味が了解できず、返歌ができないでいる。すなわち、関の戸(槇の戸)から座所に侵入し、女二の宮と契りを交わしたという実情に気付かない限りこの歌は了解できない。そして、さらに狭衣は、すでに八逢ひて逢はぬ恋^レになっているがゆえに、「まどへとや」と嘆じていることも了解できない。中納言の典侍に密通の事実を匂わしているというより、ほとんど独り言なのであり、だから「口ずさみて」と受けられている。

狭衣自身としては、「逢坂」で契りを交わしたことを、「まどへ」でその後の逢瀬が適わないことをいっているわけであり、まさに八逢ひて逢はぬ恋^レの苦衷を表出していた。また、そうであることによって、「逢坂」は、逢瀬そのものと、適わない逢瀬の両様を暗示することになる。

「逢坂」という歌枕は、男女の契りを暗示することは当然だが、また、八逢ひて逢はぬ恋^レでも使用されている。すでに引用した『後撰集』歌を再度掲出するが、詞書の説明は、八逢ひて逢はぬ恋^レそのものであり、歌の措辞からいって、諸注指摘はないが、引歌になろう。

逢ひにける女の、また逢はざりければ

知らざりし時に越えし逢坂をなど今さらに我まどふらん

この歌は、相手の女のことを十分に知らなかった時でさえ契りを交わせたのに、知り合った今になって逢瀬がままならず、「まどふ」状態にあるとする。状況的には、狭衣の場合とまさに酷似している。狭衣も先の歌で、「逢坂」の一線を越えることができたのに、「まどへと

や」と嘆じていた。

「逢坂」の用例は、大系本では飛鳥井女君の物語で一例あるが(二・81頁)、集成本ではこの後に三例使用されるだけである。そして、いずれも八逢ひて逢はぬ恋^レを暗示する記号性が認められる。この次の用例は、後朝の文がどうなったかを知りたくて中納言の典侍に文を送った、その返事の中の歌にある。

恋の道知らずと言ひし人やさは逢坂までも尋ね入りけむ

(二・156頁)

すでに密通の事情を察した中納言の典侍は、「逢坂までも尋ね入りけむ」でそれをほのめかしている。すなわち、八逢ひて^レの事実を言っているわけであり、これを見る狭衣には、先に口ずさんだ「逢坂をなほ行き帰りまどへとや関の戸さしも難からなくに」に対する返歌とも受けとられたであろう。そして、この歌によって「逢坂」は女二の宮との契りを暗示する記号となる。だから、

逢坂山のさねかづらは、人知れぬ御心ばかりにはおぼし絶えず、

(二・158頁)

という語りで、女二の宮と契りを交わしたことを指示していく。ここには周知の引歌があるが、これによって「人知れぬ」も導かれていた。

名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな

(後撰集・恋三・三条右大臣・五六四)

「さねかづら」によって「寝」が言われるわけだが、さらに「さねかづら」は「後に逢う」意を内在させた歌言葉でもあった。

さねかづら後も逢はむと夢のみに祈誓ひわたりて年は経につつ

(万葉集・卷十一・二四七九旧)

「逢はぬ恋」だからこそ、「さねかづら」に託されて「後も逢はむ」が念じられている歌ということになり、先の地の文の「逢坂山のさねかづら」にも当然「後も逢はむ」が響いていることになる。したがって、この物語の「逢坂山のさねかづら」は多様な引歌に支えられて

△逢ひて逢はぬ恋△を表象していることになる。

「逢坂」の最後の用例は、故式部卿宮の女君の物語で使用される。越えもせぬ関のこなたにまどひしや逢坂山の限りなるらむ

(四・262頁)

女君の母尼君逝去の悲報を聞いて、月明りのもとで源氏宮に瓜二つの女君の面影を想起した歌である。契りを交わすことはしなかったで、狭衣は「越えもせぬ関のこなた」とし、そのために「逢坂山」で「まどひ」したとしている。「逢坂(山)」は、△逢ひて逢はぬ恋△を暗示していることになるが、会ってはいたので、△逢ひて逢はぬ恋△の変奏とも取れよう。故式部卿宮の女君の物語は、源氏宮や女二の宮の物語表現を変奏して使用していることになるが、この点は別に考えたい。とりあえずは、「逢坂」が逢瀬とその後の適わない逢瀬の両様の意味、すなわち△逢ひて逢はぬ恋△を暗示する記号性をこの物語では保持していることだけ確認しておきたい。

四 寝所侵入と「寢覚の床の枕」——巻二

密通以後は、「逢坂」が△逢ひて逢はぬ恋△の表現になっていたが、皇太后宮邸(一条の宮)での寝所侵入の場面になると「寢覚の床の枕」に取って変わることになる。

女二の宮は母皇太后宮とともに自邸に退出して秘密の出産をし、続いて起きた皇太后宮の崩御の哀しみも重なって出家に及ぶ。それを聞いた狭衣は愕然として、師走の雪の降る中、その邸を訪れ、女二の宮の寝所に侵入していく。女二の宮はその匂いにいち早く気付く、御帳の後に逃れていく。次の引用は、その後に続く場面である。

男君も、「さなめり」とおぼゆる御気配に、我もえ忍びあへず、引きとどむると思へども、あまたある御衣どものうはべばかりぞ残りたる。「口惜しう、心憂しとも世の常のことをこそ言へ。いとかばかりまで見ま憂きものなおぼしおかれにける」と思へば、

身よりほかにつらき人なう、悔しくいみじきに、御衾も衣もさながら押しやられて、ありしながらのにはひばかり留まりたるに、よもすがら泣き明かしたまひける涙に浮きたる枕の探りつけられたるなど、いとかばかりおぼえたまふことはなかりつるを、悲しなども世の常なり。

海人も釣するばかりになりけるも、「ただ我身の上にこそはあらめ。こころの月ごろを知らず顔にて、心解けて明かす夜な夜なもありけるは、我ながらだに恨めしくいみじきに。ただかうながら死ぬるわざもがな」とおぼされて、このとどめおきたまへる御衣をひき被きて、よよとぞ泣かれたまふ。

片敷きにいく夜な夜なを明かすらむ寢覚の床の枕浮くまで

(二・196～197頁)

これ以前、皇太后宮の見舞にその邸を訪れた折、御簾越しに女二の宮の気配を感じたことがあったが、実際に側近くまで侵入したのは、密通以来ここが始めてになる。女二の宮はすでに逃れていたもので、光源氏と空蟬の場合のように、狭衣は「とどめおきたまへる御衣をひき被きて、よよとぞ泣かれたまふ」ことになるが、残されていたものももう一つ二つあった。一つは「ありしながらのにはひ」であり、もう一つは「よもすがら泣き明かしたまひける涙に浮きたる枕」になる。

女二の宮の「にはひ」への言及はここが初めてで、密会時の「にはひ」は狭衣のものであった。ここにきて女二の宮の「にはひ」に言及されたが、ここは単発的な使用になり、物語はそれほど注視していないようである。しかし、巻四になると女二の宮の「移り香」は重要な働きをすることになる。残存する匂いが、女二の宮の存在と不在を印象づけ、そうであることによって△逢ひて逢はぬ恋△の道具立てになっているわけだが、確認だけにとどめたい。

「にはひ」に対して、「よもすがら泣き明かしたまひける涙に浮きたる枕」とされる「枕」は、この後にある「床」と結合してこの後の物語展開で鍵語となっていく。「枕も浮きぬべし」というような言い

方は、狭衣自身（一・40頁）、飛鳥井女君（一・101、117頁）、一品の宮（四・197頁）などにも使用されるが、女二の宮の場合において最も持続的になる。ここでは、涙に濡れた女二の宮の枕が、先の「にほひ」と似たような働きをしているわけだが、さかのぼってみると、密通時には「身も浮きぬばかりに流れたる御涙」（二・143頁）としか語られていなかった。中納言の典侍が密通の事情を察した時の涙に濡れた様子は、やや形を変えて「ただ御枕の下は海人も釣するばかりにぞ流れ出でて臥させたまへる」（二・153頁）とされていた。これは、

恋わびて音のみ泣けばしきたへの枕の下に海人ぞ釣する

（俊頼髓脳）⁽³⁾

が引歌になるようであり、この歌は、この引用場面の、「海人も釣するばかりになりけるも」にも使用されて、照応している。「海人も釣するばかりになりける」とは、枕の下は涙であふれて枕は浮き、海人も釣ができるほどぐらいの意になるが、こうした密通時を想起させる「海人も釣するばかり」と響きあって、女二の宮の悲嘆ぶりが「よもすがら泣き明かしたまひける涙に浮きたる枕」として狭衣に把握されている。

こうした「枕」と、この侵入場面の直前にあった「袖の水とけず明かしたまふ夜な夜なは、今はじめて別れたてまつりたらむ床の心地して」（二・193頁）などとあった「床」が統合されて、この場面の独詠「片敷きに」の歌で「寝覚の床の枕」として定着する。

こうして見ると、女二の宮の涙にひたされた「寝覚の床の枕」などという言辞は、密通時を内在させつつ、この侵入時のありようを表象していることになる。狭衣は「寝覚の床の枕」を注視することによって、泣き明かしていた女二の宮の姿をありありと面影に浮かべている。女二の宮がこの場から逃れていて八逢はぬ恋Vになっているがゆえに、この「寝覚の床の枕」が強く印象づけられることになる。繰り返せば、この侵入も未遂に終わったがゆえに八逢はぬ恋Vである。そして、一度は八逢ひてVがあったので、まさに八逢ひて逢はぬ恋Vに

なる。「寝覚の床の枕」の印象は、八逢ひて逢はぬ恋Vの表現なのであり、狭衣には、逢えなかった女二の宮の形見となって八逢ひて逢はぬ恋Vを持続させる働きをしている。狭衣が「寝覚の床の枕」を想起する限り、八逢ひて逢はぬ恋Vは継続するわけである。だから、この表現は、以下のように変奏されていく。

ア かの御枕の雫

（二・199頁）

イ ありし寝覚の床の浮き枕の後

（二・206頁）

ウ 侘しき床

（二・235頁）

エ ありし雪の夜の枕の雫

（三・16頁）

オ 塵積もり古き枕をかたみとて見るもかなしき床の上かな

（三・22頁）

カ 床の上の形見

（三・23頁）

キ かのありし寝覚の床に濡らし添へたまひし濡衣（三・160頁）

ク かしこうたづね参りたりし雪の夜の枕の下の釣舟

（三・162頁）

以上の用例は、すべて先の侵入時に孕胎する変奏された表現の展開である。いわば「作中歌語」の連続になるが、こうした「作中歌語」が物語を牽引していく方法にまで高められている次第が伺われよう。また、「床」や「枕」が、女二の宮物語の鍵語になっていることも確認できる。従来、「寝覚の床」という形でしか注意されてこなかったようだが、「寝覚の床の枕」と把握することによって、右のアエクなども、掬い取れよう。

狭衣が次に密会を企てるのは、巻三の終り近くなつての法華八講後になる。巻二の侵入時に狭衣は十九歳であったのに、ここでは二十三歳になっている。四年の経過ということになるが、その間の八逢ひて逢はぬ恋Vを持続させたのが、「寝覚の床の枕」とその変奏された用例であった。用例キクは、法華八講後の御堂侵入時のものであり、ここまでこの表現は変奏されつつ継続してきたわけである。「寝覚の床の枕」の印象は強い磁場を孕むのであり、この印象が変奏されること

によって八逢ひて逢はぬ恋のありようが提示されるわけである。

これらの変奏例を見てみると、次のような語りに接続されている。

イ ありし寢覚の床の浮き枕の後は、片つかたの物思ひもまさりて、あはれにいみじくのみ思ひやられたまひつつ、

ウ 忙しき床にまどはしたまひし夜のつらさも恋しさも、

エ ありし雪の夜の枕の雫は、忘れがたうかなしう思ひ出でたまへる。

「寢覚の床の枕」が思い出の核となり、イ「物思ひもまさりて」とあるように、思慕の情がいやまず契機になってゆき、ウエのように恋しく、忘れがたいものになっている。密会は未遂に終っていたのに、「寢覚の床の枕」は狭衣にとって逢瀬にも等しいものとして機能している。そもそも八逢ひて逢はぬ恋の表現であったが、こうした変奏のありようを見ていくと、「寢覚の床の枕」の変奏と持続は八逢ひて逢はぬ恋の実際をずらしているといえよう。密会未遂が逢瀬と同じような重みで捉えられていくのであり、それが狭衣の特質となつて、次の巻三の侵入まで牽引されていくと押さえられよう。

「寢覚の床の枕」の変奏はまた、若宮も内在していくことに注意したい。用例オの狭衣詠である。

オ 塵積もり古き枕をかたみとて見るもかなしき床の上かな

女二の宮のいる嵯峨に送った、若宮などを描いた絵のかたわらに記された歌である。集成本頭注では、「古き枕」には、もぬけの床に残された枕を抱いて茫然としたかつての記憶（上巻一九七頁）と、二人の形見としての若宮とが重なっている」と指摘している。「枕を抱いて茫然とした」とする記述はなく、「御衣をひき被きて」との混同であるうが、若宮と重なるとする指摘は確かであろう。もう少し詳しくこの歌を見ると、「古き枕」と「床」は、かつて共寝した床の枕のことであり、狭衣と女二の宮との間では、弘徽殿での若宮出生の因となつた密通時のものしかない。その密通時の「古き枕」は、幻想の彼方にあるが、それを一条の宮の「床の上」に現前化させて幻視してい

る。「塵」は床に積もるもので、古来よりそれを払うのは男を待つ女の仕事であつて、払うことで男の来訪を念じていた。だから、床に塵が積もらないことを男女ともに願うものであり、塵のない床は、男女の固い結びつきを意味した。また、塵が積もるのは、共寝が久しく行われなかったことを意味した。周知の歌を引用しておくが、引歌になるう。

塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寝るとこなつの花

（古今集・夏・躬恒・一六七）

君なくて塵積りぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

（葵巻の光源氏詠）

光源氏詠は、躬恒歌を引歌としつつ、葵の上を哀悼した歌であつたが、この歌によって亡き葵の上に対する強い愛情の所在を表明していた。狭衣の場合は、この光源氏歌も引歌としつつ、出家してしまつた女二の宮に対する強い愛情と哀惜を表現することになる。「床」をいうことで、密通を強い愛情の発露であつたとし、塵が積もっているとするので女二の宮と逢えない思いを表明するわけである。そして、その密通の床と重なるように、あの「寢覚の床」が「かなしき床」として回顧されている。「かなしき床」は、いま若宮とともにいる一条の宮の「床」であり、「寢覚の床」であつた。「床」は、多様な意味を発しているものであり、強い愛情と哀惜の所在を主張するだけでなく、女二の宮の存在と不在を印象づけ、密通の床や寢覚の床を想起させて幻視され、現前するものにもなる。また、「塵積もり古き枕」が「かたみ」とされることによって、若宮が暗示される。若宮は、まさに密通の「かたみ」であつた。密通時と巻二の未遂に終つた侵入時がともに回顧され、現在の若宮を見つめる狭衣自身のありようがこうして表出されるわけである。

そもそも「寢覚の床の枕」の時点では、目を覚ました若宮の声に後髪を引かれるようにして一条の宮を後にしたが、その際に、

知らざりし葦の迷ひの鶴の音を雲の上にや聞きわたるべき

と独詠していた。「鶴の音」が若宮の声になるが、「鶴の一声」(三・162頁、四・334頁)として作中歌語になり、引用されている。「塵積もり」の歌が詠まれた時点は、以後の若宮関係の物語展開の要になるわけであり、その増幅されたありようが、先のオの歌に見られたことになる。

以上、「寢覚の床の枕」が八逢ひて逢はぬ恋の表現であったことそして、それがずらされて巻三の二度目の侵入時まで持続する次第を見てきたことになる。

五 女二の宮の独詠歌——巻三

巻三になると、一品の宮との縁談が決まり、女二の宮に対する自責と後悔の念が強まっていく。狭衣は、縁談の事情を弁明しようとして中納言の典侍を呼び出し、女二の宮への文を託そうとする。狭衣には、女二の宮に対して弁明しなければならぬ事態が一つ添加されたからである。逢瀬を企図した段ではないが、以後の展開と密接にかかわるので見ておきたい。

こまやかなる端つかたに、

「このごろは聞かせたまふことも侍らむものを、などか。」

折れかへり起きふしわぶる下萩の末越す風を人のとへかし」

(三・85頁)

「折れかへり起きふしわぶる下萩」は悲嘆にくれる狭衣自身をなぞらえ、「末越す風」は、歌の前にある「このごろは聞かせたまふことも侍らむものを」受けて、一品の宮との縁談話を自身に責任のない所から起きたこととする。「人」は女二の宮で、以下はやや訳しにくい、が、そうした窮状にある私をどうかご理解くださいとするようである。狭衣が、起居につけつつ繰返し嘆かざるを得ないのは、八逢ひて逢はぬ恋だからになるが、後悔と自責による苦悩、そして、縁談話の弁明

を言い、女二の宮からの「あはれ」(三・84頁)を庶幾した歌ということになる。「あはれ」を庶幾するものも、『源氏物語』の柏木と呼応して、八逢ひて逢はぬ恋になる。

この文を見た女二の宮の反応は、次のように語られている。

宮、つくづくとおほしつづくること多かるなにも、この「末越す風」の気色は、「過ぎにしそのころもかやうにこそは」と、すこし御目のとまらぬにしもあらで、筆のついですさびに、この御文のかたはらに、

夢かとも見しにも似たるつらさかな憂きはためしもあらじと思ふに

「起きふしわぶる」とあるかたはらに、

下萩の露消えわびし夜な夜なもとふべきものと待たれやはせし

憂き身には秋も知らるる萩原や末越す風の音ならねどもなど、同じ上に書きけがしたまひて、細やかに破りて、典侍の参りたるに、「捨てよ」とて給はせたるを、

(三・87頁)

こは、大系本などでは、「下萩の」の歌が最後になり、三首目の「憂き身には秋も知らるる」は「身にしてみて秋は知りなき」とされて、その前に置かれている。しかし、本稿の趣旨とあまり関わらないので集成本での検討を続ける。

これらの歌については、石埭敬子氏が三首続く異常性を指摘し、

「狭衣の身勝手な甘え、無責任な愛情に対するきびしい非難と反発は、女二の宮に、思わず「夢か」とよ……」の独詠歌を詠ませ、さらに「怒りにも似た非難と反発は、一首の歌を詠むことによりて解消されるものではなかった」とされている。従うべき見解であろう。

こうした歌を狭衣側に立ってみると、狭衣の八逢ひて逢はぬ恋を逆接的に照射していることになる。また、女二の宮側に立てば、女歌での八逢ひて逢はぬ恋の多くは、男の来訪が途絶えた悲哀を表現するものであったのに対して、みずから八逢ひて逢はぬ方途を選択し

た心情を際立たせている。

一首目の初句「夢か」とよは、意味がとりにくい、かつての契り
があまりにも辛いものであったので「夢であったか」としているのだ
ろう。下句「憂きはためしもあらじと思ふ」ので、「夢であったか」
とし、それとまったく同じことが一品の宮に起ころうとしているとす
る。かつての契りの意味を反芻して狭衣の薄情さを問題にし、一品の
宮に同情するわけである。それがそのまま八逢ひて逢はぬ▽方途を選
択した女二の宮のありようを暗示する。だから、この歌は、次のよう
な歌の本歌になっていく。

和歌所歌合に、遇^い不^ふ逢^い恋^{れん}の心を

夢か^{ゆめ}とよ見^みし面影^{おもかげ}もちぎりしも忘れずながらうつゝならねば

(新古今集・恋五・皇太后宮大夫俊成女・一三九一)

俊成女は、女二の宮の歌に、八逢ひて逢はぬ恋▽のありようを見て取
ったということになろう。

二首目の第三句「夜な夜な」は、逢瀬が複数あった意ではなく、た
だ一人悲嘆にくれて過ごした「夜な夜な」のことであり、その「夜な
夜な」に狭衣の訪れを一度も期待などしなかったとの意。八逢ひて逢
はぬ▽を選択した「夜な夜な」のありようを、この歌も示している。
三首目も「飽きは知らるる」であり、狭衣の薄情さを言っている。

この三首は、狭衣の不毛な八逢ひて逢はぬ恋▽のありようを照射
し、八逢ひて逢はぬ▽を選択した女二の宮像を明示している。また、
狭衣にも、中納言の典侍を通じて反古になったこの歌うたが渡される
ことによって、それなりに女二の宮の「非難と反発」伝えられ、法華
八講後の御堂侵入の場面に連絡していくことになる。特に一首目にあ
る「見しにも似たる」は、たびたび作中引用されて、狭衣の自責の念
とかかわることになる。

六 御堂侵入と「髪の手あたり」——巻三

女二の宮との八逢ひて逢はぬ恋▽は、法華八講後の御堂侵入によつ

て画期を迎えるようである。法華八講に始まり、若宮の様子、女二の
宮の百万遍の念仏、狭衣の御堂侵入と口説き、早曉の別れ、帰宅、後
朝の文と続くこの一連の展開は、逢瀬の場面として均整のとれた構成
になっており、こうしたなかでおのずと両者の関係性を語り、転機を
もたらしている。前回の侵入時を受けつつ、「寢寛の床の枕」はさら
にずらされてこの場面は仕組まれている。この一連の場面は、少し丁
寧に検討を加えたい。

法華八講が終わって僧たちが退出した後も、狭衣はひとり嵯峨に残
り、あたりの風景を眺め、独詠歌に及んでいる。

(八講の)果ての日は十三日なれば、月の光さへくまなくて、兜
率天までいとやすく澄みのぼりたまひぬべかめり。嵯峨野の花、
やうやう盛り過ぎて、女郎花色変り、尾花の袖も白みわたりつ
心細げにうち招きたるに、露は重げにきらきらと置きわたりたる
は如意宝珠かと思えわたされたるに、虫の声々さまさまにて懺法、
阿弥陀経にうち添へたるは、迦陵頻伽の声にも劣らず尊くあはれ
に聞こゆ。事果てて、僧ども人々も皆まかり出でて、残りなく
人目離れぬ心地するに、大將はえまかでたまはず、河霧さへ麓
をこめて道さまたげに立ちわたりたるに、堰にもりわずらふ水の
音なひもいとむせかへり、もののみかなしければ、やがて河の
上に作りかけたる釣殿に、つくづくとながめ入りたまひて、

大井河のせきはさこそ年へぬれ忘れずながらかはりける世に

(三・156頁)

後に引用するように、狭衣が女二の宮のもとから立ち去ろうとする
時には「月も入り果てて、霧のまよひたどとしきほどにぞ、かるう
じて出でたまひぬる」(三・167頁)とされ、「月」と「霧」が喚起され
ている。侵入する前のこの引用部と照応させているのであり、宇治十
帖に立ち込める霧さながら、晴れやらない狭衣の心象となっている。
また、「大井河…」の歌が詠まれているが、この歌の参考歌には、次の
歌が挙げられる。

大井川あせきの古くひ年経とも我忘れんとや思ひし

(古今六帖・第三・あせき・一六二四)

いずれも、年を経たものとして「大井川あせき」や「大井川あせきの古くひ」があり、それと類同するものとして狭衣詠では「忘れず」とされる八逢ひて逢はぬ恋ⅴがある。また、対比されるものとして、八逢はぬⅴ間に変わってしまった出家姿の女二の宮がいる。こうして詠まれた大井川は、女二の宮のもとに侵入して「くひまの水」と詠まれ、去る時には、「わたり川」に変換されている(これらの歌は後述)。一連の場面は「月」「霧」「川」で結構されて構成され、狭衣の心象とかわっているわけである。そして、侵入前の先の風景は、どうやら物語末尾にかかわるようだが、この点も後述することになる。

狭衣は、百万遍の念仏に励む女二の宮がいる御堂の掛金を、若宮を唆せてはさせておき、侵入を企てていく。狭衣は、「かのありし寢覚の床に濡らし添へたまひし濡衣」(三・100頁)を思い出しているが、これは、前に確認した「寢覚の床の枕」の変奏になる。女二の宮を口説く時にも、「雪の夜の枕の下の釣舟」に言及しており、巻二の侵入時がここまで揺曳していること、先に見た通りである。逆に言えば、物語はあの侵入時を対象化して新たな展開を計っている。そのため、「寢覚の床の枕」の変奏はこの場面で終止するわけだが、この点についても後述する。

女二の宮は、狭衣の匂いにいち早く気づき塗籠に退避するが、その隔ての障子を破ることもせず、かき口説くことになる。隔ての障子は、八逢ひて逢はぬ恋ⅴの障害を暗示し、二章で確認した「今一度聞こえさせてこそは」の思いが表明される。今一度逢いたい、今一度心のうちを申し上げたいとする、「今一度」の頻用は、ここが最後になる。狭衣は、この後、密通以来の過去を、すなわち八逢ひて逢はぬ恋ⅴの経過を振り返って口説いていく。

かの思ひかけざりし槇の戸の心ばへよりうち始め、今宵まで思ひ嘆く心の中を、泣く泣くしめじめと言ひ続けたまへる、まねび

尽くすべうもあらず。「かばかり物思ふ人の、生ける例にはげにしつべう聞こゆる中にも、故宮の『峰の若松』と人知れずおぼし祝ひけむを、ほの聞きて伝ふる人のありしを聞きつけたりし」心の中を、えも言ひやりたまはぬぞ、「かくれば」とはまことにや。恥づかしさも同じ涙に流れ出でぬべし。また、「思ひわびて、かしこうたづね参りたりし雪の夜の枕の下の釣舟に思ひこがれて立ち帰りに聞きつけたたりし田鶴の一声ののちは、『いかさまにして雲居のよそにはなさじ』と思ひし験にや、今は憂き世の絆にて、かくかけとどめられはべるほどに、心より外なることも侍りて、『見しにも似たる』とありし反故を見はべりしは、人やりならず、生ける心地もしはべらねど、そののちにも、『ただかやうにもや』と、まつに心をかけはべりつれば、今ぞ心のうちすこし涼しうなりて、年ごろの本意も遂げはべりぬべかめる」など、

(三・102頁)

狭衣が密通後に女二の宮と話をする機会は皆無であった。皇太后宮邸に見舞に出かけた時も、「寢覚の床の枕」の時も、言葉は交わされなかった。八逢ひて逢はぬ恋ⅴになっていたがゆえに、この口説きが密通以来初めてになる。だから、密通時を言う「槇の戸の心ばへ」から始まり、若宮誕生の「峰の若松」、寝所に侵入した時の「雪の夜の枕の下の釣舟」、その帰りに若宮の声を聞いた事の「田鶴の一声」という具合に作中歌語を引用し、これまでのありようを全的に回顧して口説いている。若宮を「いかさまにして雲居のよそにはなさじ」と思ったとするのは、帰りがけに詠んだ「知らざりし葦の迷ひの鶴の音を雲の上にや聞きわたるべき」(二・199頁)を指す以外にないが、さらに前章で見た「見しにも似たるとありし反故」のことまでに言及している。狭衣の語りは、両者のこれまでのありようを確認させるものとなるが、こうした作中歌語の引用が、物語を紡いでいく方法にまでなっていることも確認できよう。

こうしたかき口説きは、出家の意思の表明になっていくが、贅言を

費やされても女二の宮は「また聞かじ」の態度を崩さない。直接話せたことを「この世の思ひ出に」と思っていたが、そのあまりの態度に困惑した狭衣は塗籠の隔ての障子の掛金をはずし、「ただすこしあけて」、上半身を侵入させる格好で女一の宮の「御手を引き寄せ」（三・163頁）る。女二の宮は背を向けた姿で捕えられたのか、両者の向き合った様子はなく、本文では髪の手触りが語られるだけで、視覚的描写には意は注がれてない。また、契りを交わした気配もない。塗籠の障子は依然として隔ての機能をし、物語は八逢ひて逢はぬ恋であることを暗示している。狭衣のかき口説きは継続されるが、障子を「ただすこしあけ」たことで接近を意味するのか、ここでは和歌が配置されている。

藻刈舟なほにぎり江に漕ぎかへりうらみまほしき里のあまかな

いかにもいかにものたまはせよ」とて、御手を引き寄せたまへるに、（略）これはただ、

残りなくうきめを刈りし里のあまをいまくりかへしなにうらむらむ

とぞはつかに思ひ続けられたまへど、ただ、「一言葉もいらへざらむさきに疾く死なばや」とおぼすに、まことに消え入りたまひぬべき御けはひのあるかなきかなるほど、ただ昔ながらにて、

（三・163～164頁）

前者が狭衣詠で、すでに出家を思案しているので尼姿を羨望しつつ、沈黙を守る女二の宮に恨み言をいい、返事を求めている。この歌は大系本が指摘するように、次の歌を踏まえていよう。

堀江漕ぐ棚なし小舟漕ぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ

（古今集・恋四・七三二）

狭衣詠に引歌の「同じ人にや恋ひわたりなむ」が響いているとすると、狭衣詠は八逢ひて逢はぬ恋の恨みになる。一方の女二の宮は、返答の拒否を遵守し、返歌の形で歌が置かれてはいても、それは脳裡

をかすめた思いとされている。女二の宮は沈黙のままであり、八逢ひて逢はぬ恋の形は崩されない。狭衣は、何とか自制心を働かせ、契りを強要するまでには至らない。そして、前回の侵入時の「寢覚の床の枕」に代替されるものとして、次の語りが用意されている。

ただ、御髪の限り所狭かりしを、いとふさやかに手に触りたるぞ、なほいみじき心騒ぎなりける。

（三・165頁）

「御髪の限り所狭かりし」とあるのは密通時の記憶であり、今は出家しているのに尼削ぎになり、それが逆に「いとふさやかに」に感じられている。この髪の手触りは、帰宅してからも、「あはれなりつる御髪の手あたりのみ心にかかりたまへり」（三・168頁）と反芻されており、「寢覚の床の枕」に代替されるものになる。だから、この御堂侵入の場で「寢覚の床の枕」の変奏は終止し、巻四で語られる念誦堂訪問の場面では、「ありし夜の手さぐり」（四・201頁）としてこの場が回顧される。以前はもぬけの殻であったがゆえに「寢覚の床の枕」が物としての形見になったが、今回は髪が「いとふさやかに手に触」ることができたので、触感としての「御髪の手あたり」にずらされている。狭衣には、尼削ぎの「御髪の手あたり」であることによって、そうさせた自身の責任を思わせることになる。また、逢瀬に等しいものとしても把握され、その思い出が出家挫折後も八逢ひて逢はぬ恋をさらに継続させていく。

狭衣の女二の宮に対する悔恨と自責の念は拭えない。だから、

八千かへりくひまの水もかひなきによし見よおなじ影や見ゆると

（三・165頁）

と、その念を表出する。この歌も大系本が指摘するように、次の歌が引歌になる。

さき立たぬ悔いの八千たび悲しきは流るる水の帰りこぬなり

（古今集・哀傷・閑院・八三七）

後悔は、大井川の堰の枕の間を流れる「くひまの水」のように甲斐のないものであり、「さき立たぬ」ものである。贖罪は自らが同じ姿の

出家者になることで可能になるとの思いから、「よし見よおなじ影や見ゆる」と出家の決意を表出し、贖罪を懇請していく。

こうした歌々で狭衣は八逢ひて逢はぬ恋√ゆえのかき口説きをしていたわけだが、すでに時は早晩になってしまふ。後夜起きの嵯峨院が女二の宮のもとに来る気配がし、立ち去らなければならなくなり、後朝の別れのような場面になる。

今は世にあるべき心地もしたまはぬに、「これや限り」と思ひとちめたまふにぞ、なほ世の常ならぬ御心惑ひなりける。

後の世の逢ふ瀬を待たむわたり川わかるるほどは限りなりとも

とて、御袖はとみにもゆるしたまはず、さくりもよよとはこれと言ふにやと見ゆるに、院もいと近くおはしませば、心にもあらず引きすべして立ち出でたまふ。

(三・166～167頁)

ここで「これや限りと思ひとちめたまふ」とあるのは、出家を思うゆえに、女二の宮とはこれが見納めとするわけだが、その代償として念じられるのが歌にある「後の世の逢ふ瀬を待たむ」ことである。この世での逢瀬は、かたくなな女二の宮の拒否の態度によってすでに絶望的である。八逢ひて逢はぬ恋√の状態は改善の兆しはなく、拒絶され続けるのが現実であるがゆえに、そして、出家を思うがゆえに、この世での逢瀬は「これや限り」である。しかし、八逢ひて逢はぬ恋√であったがゆえに、「後の世の逢ふ瀬」は可能なのである。「わたり川」(三途の川。三瀬川とも)で、狭衣は女二の宮と逢えるのである。周知のように、三途の川を女は初めて契りを交わした男に背負われて渡るとされていた。「後の世の逢ふ瀬」の有無は、すでに物語の男女が別離に際して最後の問題にしてきた信仰であった。光源氏は藤壺と「後の世の逢ふ瀬」がないことに慄然として、

なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ

(朝顔巻)

と詠んでいた。「みつの瀬(三途の川)」で途方にくれるだろうかとし

たのは、藤壺が初めて契りを交わした男が、光源氏自身でなかったからである。⁽⁸⁾三途の川で光源氏は藤壺の姿を見ることはないのである。

光源氏のこの歌は絶望の表現であったわけだが、狭衣の場合は、先の歌でかるうじて救いを見出だしている。三途の川での逢瀬が期待されるからにほかならない。こうした発想は、以後の物語類で頻出していくのであり、『とりかへばや』『昔の衣』『いはでしのぶ』あるいは『はずがたり』などに語られることになる。

狭衣は、現世での逢瀬に絶望しながら、八逢ひて逢はぬ恋√であったがゆえに、来世での逢瀬に希望を託すことができた。だから、死を希求するような歌を詠んで帰宅することになる。

入りがたの月くまなくさし入りて、ひとかたにありか定めたる雲のたたずまひ言ひ知らず心細げなるに、まことに心は空になり果てぬ。

「待てしばし山の端めぐる月だにもうき世にしばしとどめざらなむ

さそはば」などがめ入りて、とみにも立ちのきたまはぬほどに、月も入り果てて、霧のまよひたどとしきほどにぞ、からうじて出でたまひぬる。

(三・167頁)

侵入以前の風景と照応する「月」「霧」がここに配置されている。狭衣は、「山の端めぐる月」に、あの世に連れて行ってほしいと念じているが、その月は「入りがたの月」である。だから、「待てしばし」と哀願するわけだが、間もなく「月も入り果てて」しまう。月に託してあの世への旅立ちを念じて、その月が山の端に沈んでしまったところに、あの世への希求は、希求だけに終わることが暗示されている。出家を願ひ、来世での逢瀬を念じたとしても、狭衣はまだこの世で低廻しなくてはならないわけである。「霧のまよひたどとしきほど」に帰途につかなければならない所以である。

帰宅して、狭衣は「あはれなりつる御髪の手あたり」を思い出しつつ、思案にふけり、出家を思っていく。悲しさのあまり『催馬楽』の

「朝津」を歌つても、はっきり理解されるのは、やしつがたいわが身である。

ひとへにぞ思ひ立ちたまひぬるにも、言ひ知らずもののみかなしければ、慰めにかたはらなる琵琶を引き寄せて、わざとならず弾きすさびつつ、「あさむづの橋」と歌ひたまへる声など、我ながら、げにおぼろげならずはやしつがたうおぼし知らるべし。

(三・168頁)

狭衣の歌う「朝津」は、年老いた遊女の嘆きの歌とされるが、そこに狭衣は八逢ひて逢はぬ恋の嘆きを重ねていよう。

朝津の橋の とどろとどろと 降りし雨の 古りにし我を 誰ぞこの 仲人たてて 御許の容姿 消息し 訪ひに来るや さきむだちや

「朝津」の朗詠は、「御許の容姿 消息し 訪ひに来るや」が響いて、女二の宮への未練を表現していよう。また、「やしつがたう」とされる理由の一端は若宮の存在である。帰宅しての思ひの帰結は、出家の困難さであった。

翌朝、狭衣は消息を嵯峨に送っている。

命さへ尽きせずものを思ふかなわかれしほどに絶えも果てなで

(三・170頁)

この歌は、まさに後朝の歌の趣である。「わかれしほどに絶えも果てなで」に、嵯峨で表明した出家の決意がままならない意が込められているが、別れた後の尽きない思ひの所在を言う事は、契りを交わした後を送る後朝の歌の趣向そのものである。実際には「御髪の手あたり」という触感だけが手応えであったに過ぎないが、狭衣には逢瀬そのもののようには嵯峨の一夜が捉えられ、後朝の歌たらしめている。内容的には、命も尽きず、まして、出家もできないふがいなさの懺悔になるが、八逢ひて逢はぬ恋の狭衣には、こうした一夜が貴重なのである。

以上、法華八講後の御堂侵入の段前後の一連の場面を検討した。

八逢ひて逢はぬ恋は継続していたが、巻二の寝所侵入とは違った趣向が認められ、二人の関係性に画期をもたらしていた。「今一度」逢いたいとする思いや、「寝覚の床の枕」の変奏がこの段で収束し、三途の川での逢瀬を念じることで、八逢ひて逢はぬ恋に決着がつくれようとした。狭衣の出家が主題化されたからだ、それは賀茂明神の神託によって挫折を余儀なくされる。物語はさらに低迷する狭衣にこたわりつつ、女二の宮との八逢ひて逢はぬ恋もさらに継続することになる。さらに巻四の検討が必要である。

七 念誦堂訪問と「移り香」——巻四

巻四は賀茂明神の神託を示す和歌で始発する特異な方法によっているが、しばらくは狭衣の出家とその挫折が主題化されている。女二の宮との関係性は、八逢ひて逢はぬ恋から逸脱している面があり、巻三までとは微妙な差異をみせている。次は、出家挫折後、女二の宮に憂悶を訴える段である。

いみじくおぼし嘆かるる慰めには、入道の宮にぞ、「後の世にさへ捨てられたてまつるべき宿世にや。あさましう本意なき」心のうちなど、少し漏らしたまひて、

「急げども行きもやられぬうき鳥をいかにかあまの漕ぎ離れけむ

言ひしにかはる心のほどを、いとどいかにと恥づかしきまで」など書きつくしたまへるを、例のほの見たまひて、

いかばかり思ひこがれしあまならでこのうき鳥を誰か離れむなどおぼしつづけらるれど、はかなかりし筆のすさびも、見しやうに聞こえたまひし後はうしろめたうて、御心のうちよりも漏らしたまはざりけり。

(四・195～196頁)

ここでは、女二の宮が狭衣の「おぼし嘆かるる慰め」になる人として、こうした語りは、巻四になつてのものになる。巻三では、

「慰め」を女二の宮に求めても拒絶されるだけであった。また、狭衣の消息を「例のはの見たまひて」とされているが、大系本では「例の、心より外にはの見給ひて」とあり、ニュアンスは違っている。女二の宮は、御堂侵入後の後朝の文を「いまさらに尼衣の褌ばかりも手馴れたまはじ」(三・170頁)とされていたし、女二の宮が三首独詠する契機となった狭衣の消息も「すこし御目のとまらぬにしもあらで」(三・87頁)と微妙であった。「例のはの見たまひて」は、本文的に問題があるが、もしこの通りなら、「おぼし嘆かるる慰め」とされたことと見合って、卷三までとは違った関係性を掘り起こそうとしていることになる。しかし、贈歌を見ての反応は卷三のままである。

こうした語りは、女二の宮が、これまでの入逢ひて逢はぬ恋の嘆きではなく、二人の歌の併置に示されるように、不出家の嘆きを訴える対象となったことを意味しており、逢瀬ではなく親密な語らいが望まれるようになっていく。そういうものとして、先の引用があり、この後にある念誦堂訪問がある。ここは、すでに侵入という印象はない。

宮は御念誦堂におはしましければ、やがてそなたの御簾の前に近く候ひたまふに、(略)御簾をひき被きたまへば、人々もみなすべり入りぬるに、御几帳も押しやりて見たまへば、御経箱もあきたり。法花経なるべし、巻々あまた軸のもとまで巻き寄せられて、御数珠は脇息にうち掛けられて、櫛の香の香はなやかなるに、さまざまの移り香どもにはやされてあはれになつかしきにも、ありし夜の手さぐりまづ思ひ出でられて、ただ今さし向ひたてまつらまほしきに、例の涙こぼれぬべき気色にて、つくづくと見渡したまへるまみなど、尽きせずものあはれとおぼしたり。

(四・201頁)

引用を略した部分の中納言の典侍と対面している箇所になるが、狭衣は「御簾をひき被きたまへば」とあるように、侵入を企てる気配はない。しかし、それだけで女二の宮は、「人々も」とあるように、女

房たちといち早く姿を隠してもぬけとなり、仏具と香だけが残される。そして、ここではこの多様な香りがこの場を表象している。「櫛の香」は仏道を象徴しているが、「さまざまの移り香」は女二の宮その人を偲ぶよすがとしてある。不在を印象づける「移り香」であるゆえに、「ありし夜の手さぐり」が回顧されている。卷三の御堂に侵入した時のことであり、「ありし夜」はその思い出の時点として固定されている。その時の髪の触感に代わって、ここでは「移り香」が入逢ひて逢はぬ恋を表象しており、次のような香によった語りも続いている。

薄香なる御扇のあるを、せちに及びて取り寄せたまへれば、なつかしき移り香ばかりは昔に変わらぬ心地するに、はなやかならぬ下絵などのさま変りたるは、なほいとあはれに、飽かずかなしくおぼされけり。

手に馴れし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる
と片仮名に書きつけて、もとのやうに置きたまひつ。

(四・202～203頁)

髪の触感はい前のものであった。今この場を彩るのは「移り香」である。扇に焚きしめられていた「なつかしき移り香」は、入逢ひて逢はぬ恋の経過とともに今現在を表象している。女二の宮の「移り香」は、巻四のこの場で新たな鍵語となったものであり、これまで女二の宮の「香」に関して物語は重きを置いていなかった。先の御堂侵入時では、法華八講の折の「名香」と、侵入した狭衣の「匂ひ」だけであった。それより前の寝所侵入では、同じく侵入する狭衣の「匂ひ」と、女二の宮の「ありしなごらのにほひ」(三・197頁)があったが、「寝覚の床の枕」の方が印象的であった。さらにその前の密通時には、狭衣の「匂ひ」しか語られていなかった。こうして「香」「匂ひ」をさかのぼってみると、この念誦堂訪問の段は、「移り香」が重要な働きをしていることになる。そして、物語の末尾に位置する女二の宮との対面では、「さにや」とおぼゆる御にほひ(四・371頁)

が語られることになるが、この点は後に触れたい。

要は、逢瀬に代わるものとして、「寢覚の床の枕」から「御髪の手あたり」になり、さらにここに来て「移り香」になったことが確認できればよい。視覚、触覚、嗅覚と多様である。

狭衣詠にある女二の宮の「手に馴れし扇」が「それと見えながら」というのは、移り香が昔のままであることを言い、「色ぞことなる」は下絵が出家にふさわしいものになっていることをいう。狭衣は、自らの出家が挫折したがゆえに、出家者である女二の宮にかかわろうとするわけである。

こうした場面を通過することによって、女二の宮へのかかわり方が、これまでとさらにずらされてきている。すでに、故式部卿宮の女君との物語が進行しているせいもあり、八逢ひて逢はぬ恋の嘆きを、「今一度」に強く託すことはなくなっている。しかし、女二の宮への自責の念は深く潜行しており、未練は消しようがない。こうした状況を暗示するのが、次の引用部になる。狭衣はすでに二十六歳、前年には故式部卿宮の女君との結婚も果たしている。

かやうになのめならず見るかひある人（故式部卿宮の女君）を、朝夕に見なづさひたまふには、過ぎにしかたのもの嘆かしきも忘れたまひぬべけれど、若宮の夜の御懷争ひの若々しさを慰めたまふたびごとにも、まづかき曇りものあはれる心のうちは、つゆばかりありしに変わることもなかりけり。「とどまかうざまにつけつつ、あさまじう思はずなる心の程を見えたとまつりてもやみぬるかな。一品の宮に参りそめしころほひは、心のうちのこがれまどひしほどを、『夢のうちに通ふ魂あらば、おのづから知りたまひなむ』と頼まれしを、いとど、『見しにも似たる』とありし御手習は、いとほしくかなしかりしものから、また、なべて世づかぬ心の癖ともおぼしやすらむと、思ふかたも慰められしを、このごろは、姨捨山の月にはあらぬ我が心にも、聞こえやらむかたなうて、久しく聞こえさせたまはぬも、またいかやうにか

おぼしならむ」と、人やりならず嘆かしくて、御方に一人ながめ臥したまへる夕暮の空の気色、とり集めていと忍びがたきに、おぼしあまりて、例の心ときめきに、少しほのめかしたまへり。

ながむらむ夕べの空にたなびかで思ひのほかに煙立つころと聞こえたまへり。（四・299～300頁）

「女二の宮の物語」と「故式部卿宮の女君」とがどのようにかわるかを示唆すると段して注意されるが、今はこの点に言及する余裕はない。要は、傍線を付した「過ぎにしかたのもの嘆かしきも忘れたまひぬべけれど」「姨捨山の月にはあらぬ我が心にも」などである、故式部卿宮の女君と結婚したことによって物思いが和らげられている様が確認できればいい。それにともなうて、「聞こえやらむかたなうて、久しく聞こえさせたまはぬ」とされるように、女二の宮に久しく消息がされなかった次第も確認できる。また、結婚のことも贈歌で女二の宮に匂わされている。「夕べの空」が女二の宮を暗示し、そちらに「たなびく」こともせず、「思ひ」の「火」は、「ほか（故式部卿宮の女君を暗示）」の所に「煙」がたってしまったと告白している。こうした告白に狭衣の酷薄さも伺われるが、結婚の告白が懺悔になっているということになる。

物語は、この後、狭衣即位の問題に移行することで若宮の処遇が取り沙汰され、それにともなうて女二の宮のことが語られるようになる。故式部卿宮の女君（藤壺）皇子出産の後には、「かの鶴の一声聞きつけたたりし雪の夜」が回想され、「かの昔のほのかなりし灯影」（四・335頁）に通う若宮の容貌が見られている。若宮が元服し、兵部卿宮になった際には、「雲の通ひ路跡絶えて後」（四・347頁）とされて、兵部卿宮に女二の宮への歌が託されて届けられている。女二の宮は、若宮にかかわることで語られるというあり方がここでも確認できる。女二の宮の返事は当然なく、「今よりだに、かばかりも聞こえさせおどろかさじ」（四・350頁）と未練をふりほどこうとするが、「なほ立ち返る心」もおさえがたい。そんな様子を藤壺に気付かれて、「野中の水」

(四・351頁)の贈答で弁明する次第となる。こうした語りがまだ持続しているところに女二の宮の、物語における重さが逆にうかがわれるわけだが、もう主題をになう存在ではない。しかし、その重さゆえに、物語の末尾は女二の宮との対面が企図されている。最後にその場面を簡単に見ておきたい。

八 最後の侵入と「女郎花」——巻四

嵯峨院は病篤く、たつての希望で狭衣帝(以下、狭衣とする)の嵯峨行幸となる。物語最後の場面である。嵯峨院から御子たちの後見を依頼された後、狭衣は女二の宮のもとに立ち寄っている。

帰らせたまひなむとて、入道の宮のおはします中隔ての障子口に寄せたまひて、御扇を少し鳴らさせたまへれば、中納言の典侍聞きつけて参りたるも、昔の心地せさせたまひて、いとものあはれなり。

「九重の宮仕のむげにおろかなるも、このごろはいとことわりと見ゆる野辺の景色かな」とのたまはせて、「かかるついでなどに、みづから聞こえさせでは、またいつかは」と、例の心尽くしなる御気色もめづらしくて、参りて聞こえさすれば、常よりものおぼし乱るるころにて、「何事をかは聞こゆべからむ」とて動かせたまはぬを、院も聞かせたまひて、「みづから、なほ聞こえさせたまへ。人づてにはあるまじきことなり」と御消息あれば、いとうひうひしくつましけれど、やがておはします所近き程なれば、少し寄せたまへるを、「さにや」とおぼゆる御にほひのうち薫りたるも、まだ慣はせたまはざりつることなれば、心騒ぎしうれしきに、胸さへおどろおどろしく鳴るも、人わろき御心なり

(四・370〜371頁)

狭衣は扇をならして合図をしており、侵入をたくらむ気配を見せていない。すでに二十九歳になっており、念誦堂訪問から六年の経過があ

る。女二の宮の態度は変わっていないようだが、嵯峨院からの消息によつて、「やがておはします所近き程なれば、少し寄せたまへるを」とされている。帝に対する敬意の表れになるが、この近づこうとする素振は物語で始めて語られるものになる。狭衣は、女二の宮の「さにや」とおぼゆる御にほひのうち薫りたる」気配を感じているが、「まだ慣はせたまはざりつることなれば、心騒ぎしうれしきに、胸さへおどろおどろしく鳴るも、人わろき御心なり」とされている。この女二の宮の「にほひ」は、直接的には念誦堂訪問の際の「移り香」になる。あの「移り香」の記憶がここで蘇っていると取れよう。八逢ひて逢はぬ恋の記憶と経過である。狭衣は、この後、女二の宮への過失を後悔しつつかき口説いていくが、女二の宮の反応に変わりはない。そして、歌を詠みかけて最後の侵入を企てていく。

消え果てて屍は灰になりぬとも恋の煙は立ちも離れじ

とのたまはするまに、御簾の内に半らは入らせたまひて、御衣の袂を引き寄せて、泣きかけさせたまふ涙の雫のところせさも、恐ろしくわりなきに、

(四・372頁)

狭衣のこの歌については、源氏宮に寄せる歌との措辞の類似が指摘されているが、それに言及する余裕はない。ここでは、「恋の煙は立ちも離れじ」とするところに、狭衣の八逢ひて逢はぬ恋の再燃と持続を確認できればいい。だから、狭衣は「御簾の内に半ら」だけ体を差し入れていくが、完全な侵入ではない。女二の宮が御簾近くにいたため、まず「御衣の袂を引き寄せ」たとれるが、契りまで強要しようとしたかどうかは分からない。しかし、嵯峨院から狭衣の帰還を促す仰せによつて、契りは未然に防止されている。だから、八逢ひて逢はぬ恋の路線は崩れない。そして、最後の場面になる。

御前の花、盛りに咲き乱れて、夕露重たげにて紐解きわたしたる色々、いづれともなく見置き難きなにも、女郎花の、人の見ることや苦しからむ、霧の絶え間わりなげなる気色にて立ち隠れるは、なほ、いと過ぎがたくおぼしめさる。

立ち返り折らで過ぎ憂き女郎花なほやすらはむ霧の紛れにと、ながめ入らせたまへる御かたちの夕映え、「なほ、いとかかる例はあらじ」と見えさせたまへるに、世とともにものをのみおぼして過ぎたまひぬるこそ、「いかなりける前の世の契りにか」とこそ見えたまへれ。⁽¹⁰⁾ (四・373頁)

この末尾と物語冒頭部が照応しているとする説があるが、この点にも言及する余裕はない。ここで狭衣が眺めている風景は、卷三の御堂侵入の前に位置した風景と相似していることを確認したい。卷三では、この時点より季節の進行はやや進んでいて「嵯峨野の花、やうやう盛り過ぎて」「女郎花色変り」とされていたが、末尾では「御前の花、盛りに咲き乱れて」おり、女郎花も当然盛りである。残照であるかのように、花は盛りなのであり、卷三と照応させることによって八逢ひて逢はぬ恋の経過を暗示しているととれる。

女郎花に関しては、「をみなへし」に見立てられるのはたいに「旅の野で男を魅了する女」という役回りの女性に限られ、恋人である女性をなぞらせることはまずないといつてよいのである⁽¹¹⁾とする説とどうかかわらせるかが問題になるが、この末尾では女二の宮が女郎花になぞらえられているとおきたい。「折る」ことで契りを暗示する秋の植物の中で、女郎花はその代表になるわけで、物語は末尾にいたっても狭衣が八逢ひて逢はぬ恋の解消を念じている、すなわち、逢瀬を期待していることを提示している。だからといって、この狭衣歌から「女二の宮との結婚を象徴的に認証している」とするのは躊躇されるのであり、物語は、最後まで狭衣に八逢ひて逢はぬ恋を実感させているのだと思われる。八逢ひて逢はぬ恋の憂愁の念の所在を狭衣に確認し、決して満たされない思いが存在することをあかしていることになる。女二の宮の物語は、八逢ひて逢はぬ恋で一貫していたのである。

注

- (1) 『和歌文学大辞典』(明治書院、一九八六年三月、滝沢貞夫氏執筆)
- (2) 石笠敬子氏『狭衣物語』の和歌『和歌と物語』和歌文学論集3、風間書房、一九九三年九月
- (3) 樋口芳麻呂氏「海人も釣すばかりに」『源氏物語』「宿木」の巻の引歌一首について『愛知淑徳大学論集』19、一九九四年三月に、「宿木」巻でも引歌とされている「恋をして音のみ泣けばしきたへの枕の下に海人ぞ釣する」(『伊行釈』所引)が、初句が「恋わびて」の形で『俊頼髄脳』「顯昭陳状」などに引かれているとの指摘がある。また、『狭衣物語』「夜の寝覚」にも言及されている。
- (4) 「寝覚の床」の背景としては、後藤康文氏『狭衣物語』作中歌の背景(二)『文献探究』23、一九八九年三月に指摘がある。なお、飛鳥井女君に「敷きたへの枕ぞうきてながれぬる君なき床の秋の寝覚に」(一・117頁)とする歌があり、女二の宮の「片敷に」の歌と措辞が共通している。この点については別に考えたい。
- (5) 用例カ「床の上の形見」に対して、集成本頭注に、「狭衣詠を圧縮した、一種の作中歌語(物語内で作られ生かされている歌語)の働き。若宮が故皇太后宮の子でなく女二の宮と狭衣との間に生れた秘密を言う」とある。
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 「峰の若松」については、拙稿「狭衣という人―狭衣物語の「人」表現―」(『古代文学研究 第二次』6、一九九七年十一月)で扱った。
- (8) 藤壺や紫の上と「三途の川」のかかわりは、拙稿「朝顔」巻の意味「紫の上造型論」新典社、一九八八年六月、同「紫の上の死と光源氏―御法」巻―(『光る君の物語』源氏物語講座第三巻、勉誠社、一九九二年五月)などで扱った。
- (9) 久下裕利氏「狭衣大将の人物造型」(『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九三年一月)など。
- (10) 森下純昭氏「狭衣物語と山吹」(『岐阜大学教養部研究報告』13 一九七七年二月)、久下晴康氏「狭衣物語」結末部の考察(『平安後期物語の研究』新典社、一九八四年十二月)など。
- (11) 平田喜信・身崎壽氏編『和歌植物表現辞典』(東京堂出版、一九九五年七月)。
- (12) 注(10)の久下氏の論。